



ベルチャ・クアルテット (2024.6.28) © 大窪道治

世界を牽引する二大クアルテットの豪華競演

ベルチャ・クアルテット エベーン弦楽四重奏団

[Interview] ベルチャ・クアルテット、岡本侑也
弦楽四重奏を切り拓く、傑出したふたつの個性

戸部 亮

Trio Rizzle [トリオ・リズル]

Artist Interview

毛利文香 (ヴァイオリン) / 田原綾子 (ヴィオラ) / 笹沼 樹 (チェロ)

信頼する仲間とともに…弦楽トリオの地平を拓く冒険へ

[Schedule 2025.1～6]

[Information]

第16回 TOPPANチャリティーコンサート 東 亮汰 (ヴァイオリン) & 五十嵐薫子 (ピアノ)

ランチタイムコンサート Vol.132 荒木奏美 (オーボエ、オーボエ・ダモーレ)

キラリふじみ・コンサートシリーズ ニューイヤーコンサート 2025



Belcea Quartet × Quatuor

エベヌ弦楽四重奏団との八重奏で世界をめぐるベルチャ・クアルテット。
アメリカツアーの最中、3/27のプログラムや八重奏について、メール・インタビューしました。

— 3回目のトッパンホール登場です。ホールの印象やトッパンで弾く面白さなど聞かせください。

音楽家にとって演奏会場のクオリティはとても重要です。お客さまとアーティストとの間に言葉にはできない絆を育むには、いくつかの基準を満たさなければなりません。まずホールの響きが真っ先に浮かびます。次に客席の静けさ、お客さまの集中力。そしてホールのサイズです。弦楽四重奏はオーケストラではないので、トッパンホールのサイズはお客さまと演奏者との間に、ある種の親密さを生み出してくれます。これらのクオリティすべてを兼ね備えたトッパンホールは、私たちの公演に最適な会場といえるでしょう。

— 3/27のプログラム（シェーンベルク第1番、ベートーヴェン第14番）の意図、狙いについて、またそれぞれの曲の魅力をご紹介ください。

私たちは今年結成30周年を迎えます。その節目を祝うのに相応しいプログラムだと考えています。ベートーヴェン第14番は、私たちにとって最も共感できる作品であり、弦楽四重奏のレパートリーの頂点です。ベートーヴェンはこの作品のなかで、おそらく彼のほかのどの弦楽四重奏曲よりもダイレクトに音楽的表現の核心に迫っています。壮大なスケールのなかに絶え間なく流れるような弧を描き、音楽の流れを守るためにすべての形式的な制約が取り除かれています。その結果、西洋文明のなかで最も完成された音楽の表現のひとつが生まれたのだと思います。

そして、シェーンベルク第1番を選んだのは、この曲がベートーヴェン第14番と組み合わせるのに最適だと信じているからです。この作品の巨大かつ複雑な構成を構築するうえで、シェーンベルクが主にベートーヴェンからインスピレーションを得ていたのは明らかです。この弦楽四重奏曲は調性がい尽くされ、新しい和声言語に道を譲ろうとしていた転換期である20世紀初頭に書かれました。この曲は、もうひとつの音楽の旅——苦悶と混乱の旅であり、ときには混沌と破壊の瀬戸際にいながら、最終的には超越的な美と平和という解決を「得る」旅です。弾き手にも聴き手にも非常に難しい音楽ですが、解決を手に入れる努力に見合う価値

があると、私たちは確信しています。

ベートーヴェンとシェーンベルクは、私たちが何者であるかを教えてくれる存在です。この傷つきやすく弱い人間という存在が、世の中で自分の居場所を探す旅において、とてもいい道標になってくれます。

— エベヌQとは、すでにヨーロッパでツアーをされていますね。ベルチャQとはかなりタイプの異なる団体だと思いますが、なぜ彼らと組んだのか、また実際に共演した感想をお聞かせください。

とてもシンプルな話で、彼らと一緒に演奏するのが本当に楽しいからです。お互いに尊敬と称賛の気持ちを抱いているので、それぞれの違いから学び、それが刺激的な仕事につながっています。例えば、彼らは音に対してかなりフィジカルにアプローチしますが、私たちはフレーズのなかにある生命にこだわります。これは魅力的な交流です！そして、私たちはお互いのことがとても好きなので、ツアーもコンサートもこのうえなく楽しいです。— 今回の公演を心待ちにしている聴衆に向けてメッセージをお願いします。

世界のなかでも特に好きなホールのひとつであるトッパンホールに戻れることを、心から楽しみにしています。私たちは日本のお客さまが大好きですし、私たちの演奏に対する反応に毎回とても感動しています。3月の公演では、大切な友人であり音楽仲間のエベヌQとともに、忘れがたいひとときになることをお約束します。みなさんに会えるのが、いまから待ち遠しいです！



“弦楽四重奏”を切り拓く、傑出したふたつの個性

弦楽四重奏。日本では弦楽四重奏は限られたプロ愛好者による秘密の花園楽園の趣が抜けきらない。しかも花園には高い壁がある。伝説的な弦楽四重奏団より現代の団体の方が演奏技術は進歩している。だからこそもっとライブで聴く人が増えそうだが、いざ会場に行こうにも特別感ある雰囲気の花園から漂う。それが「難しい」という言葉で片付けられて花園の壁は高いまま。日常のコンサート生活になかなか浸透していない。

しかし壁を越えて、聴きたいという動機に突き動かされる団体がある。一例は4人が生み出す響きに管弦楽団を聴くかのような交響乐的な厚みがあることだ。もう一つは定番化している弦楽四重奏曲の定番曲を新曲や現代曲へ広げる、ないしはジャズやロックなどジャンルを跨ぎ、しかもそれらのジャンルも見事に弾きこなす団体。そのような特徴に魅了され一般の聴き手は壁を越境していく。もちろん心の境を超えて聴くのは世界最高と称される上澄み層の団体。ベルチャ・クアルテットとエベヌ弦楽四重奏団が属するカテゴリーだ。

ベルチャ・クアルテットは1994年に結成。もう結成30年になるのかと思うと感慨深い。彼らが世に出てきたとき、今風ではない古さを感じた。古風と感じた理由は第1ヴァイオリンのコリーナ・ベルチャが主導して、他3人を従えるスタイルを強く感じたからだ。ただ単なるオールドスタイルの演奏なら印象に残らない。インパクトを与えたのはアマデウス四重奏団やアルバン・ベル

ク四重奏団の精神的後継を意識した、古典と委嘱新作を含む現代をマリアージュさせるプログラミングの「切り口」、コリーナ・ベルチャに導かれる演奏の冴え冴えとした「切れ味」だ。古風と今風、怜悧に磨かれた鋭さがオリジナリティある魅力と思わせた。

2000年頃からは第1ヴァイオリンの強力な推進力はそのままに、3人が比較的对等なアンサンブルを作るようになった。それはベートーヴェンやバルトーク、ハイドン、モーツァルトといった古典作品を、香車のような鋭さ一本からより交響乐的な厚みのある響きで演奏するようになってきた時期ともみなせよう。

彼らのダイナミックでシンフォニックな弦楽四重奏は録音と実演が差異なく供された。過去の名クアルテットに慣れ親しんだ耳は、そのような彼らに一種の懐かしさを感じつつ反応する。一般の聴き手を魅了させる演奏となり、再び弦楽四重奏の楽園入境に誘った。

今回エベヌ弦楽四重奏団の公演の注目点は、何といってもお馴染みのトッパンホール・アーティスト、岡本侑也が加入して初めての日本公演であること。トッパンホールが客席と一緒に大切に育ててきた岡本が、トッパンホールで行った無伴奏リサイタルはいずれも素晴らしい公演だった。藤倉大《osm》(トッパンホールがジャン＝ギアン・ケラス向けに委嘱した超難曲を軽々と、しかもケラス以上に見事に弾いた！)、ペンデレツキ、ヒンデミットと印象深い。そして黛敏郎《BUNRAKU》。音を遣うかのように旋

律や抑揚を涼しげに加え、リズムの強度も軽やかに調節して語りの節回しも巧みだった。

文楽／《BUNRAKU》が持つスイング感、ビート感。それはエベヌ弦楽四重奏団の特徴と通じる。美しい音を保持させながら、旋律をスイングさせて、節度あるビート感で曲をキャリーしていくエベヌ弦楽四重奏団。また彼らはクラシック音楽の垣根を軽々と超えてアクティブな演奏を美しく聴かせる。彼らのジャズの演奏はインプロヴィゼーション豊かで聴いていてワクワクする。そう、エベヌ弦楽四重奏団は壁を自ら壊して楽園世界を開かれたものにしていった。岡本が加わってこれまでも増して聴き手に積極的に訴求して、巻き込んでいく形で楽園を拡張していくはずだ。

そして今回は両クアルテットによるオクテット公演という贈り物がある。メンデルスゾーン《弦楽八重奏曲》やエネスク《弦楽八重奏曲》はイヴェント事があるとしばしば取り上げられる定番曲。しかし世界の頂点に立った弦楽四重奏団が組んで聴く機会が、今後そうあるとも思えない。地味と思われがちな4人で作り上げる弦楽四重奏の世界。秘密の楽園に引き込む4人と楽園の垣根を取り払い、領地を広げる4人。傑出した特徴で聴き手の心をとらえ、越境させ／していく彼らが生み出す八重奏は魅惑の花園であるに違いない。

(とべ・あきら／音楽評論家)

新メンバー岡本侑也、エベヌQを語る



Ébène

「カルテットに興味ある？」と声をかけてくださいました。それまでカルテットに取り組んでこなかったことに少し後悔もあったので、いきなりエベヌQとは思いつつ一念発起、トライアルに挑戦することになりました。

まずはお試しでラフな雰囲気のほか、3曲ほど合わせてみたら良い反応をいただけて、すぐにツアーに参加することに。僕は余裕もなく必死でくらいついていく感じだったんですが、特にエベヌQのイメージが強いラヴェルで「何千回も弾いてきたけど、めちゃくちゃ上手かったよ」と言われて、ものすごく嬉しくて天にも昇る気持ちでした。その後のツアーにも参加させてもらい、今年正式加入となりました。初めて合わせたときから、すごく彼らに魅力を感じていて、音楽的なレベルの高さはもちろん、3人の人柄の良さが心に沁みて、こんな素敵な人たちと一緒に音楽をつくっていたら幸せだなと思っていたので、本当に嬉しかったですね。

みんなとにかく良い人なんです。ピエールはピュアな心の持ち主で、音楽以外の面でも強いこだわりをみせる熱い人。ガブリエルは僕と同じ左利きなので、思考回路が似ているところがあり、共感ポイントが多いです。2ndを担当しているからか、周囲への心配り・気配りが絶妙で尊敬しています。マリーも周りの人の気持ちをすぐに察知して行動するコミュニケーション能力が高い人。隣にいただけで不思議と安心感があります。先月、ミュンヘンのお寿司屋さんで、30歳の誕生日をメンバーがお祝いしてくれて、みんなからの手紙とクーポン券をもらいました（笑）。ガブリエルから二人でレストランに行ける券を、マリーはショッピングが大好きなので一緒に買い物に行ける券（笑）。僕より年上なのに、そんな遊び心を忘れないところがすごい好きですね。みんな日本が大好きなので、3月の公演を本当に楽しみにしています！

（2024年11月／取材・文：トッパンホール）



信頼する仲間とともに…弦楽トリオの地平を拓く冒険へ

― 結成のきっかけになった〈ランチタイムコンサート〉（2020年8月）から4年、名前を冠した第1回公演（2021年6月）からも、早や3年半経ちました。毎公演、非常に充実したリハーサルを経て本番に臨み、弦楽トリオの新たな地平を拓いている印象の Trio Rizzle です。

笹沼：毛利さん、田原さんとは同じ桐朋学園出身。長年の室内楽仲間ですし、いろいろな編成でずっと一緒に弾いてきました。ですのでトリオも最初から自然に入れましたが、3人だけの弦楽三重奏では個々が担うもの、音楽づくりの過程がほかの編成とだいぶ異なっていて、“常にお互いを聴き合う”状態は Trio Rizzle で初めて経験しましたし、ふたりの新たな面にも触れながら、回を重ねて、非常にインテンシブなグループになってきたと思います。3人だけなので、アイディアに加えて、和声の音程の感覚をすり合わせるような地道な作業がとても大切で、トリオをはじめて以降はそういった事を強く意識するようになりました。

田原：ふたりは、プライベートも含めて気兼ねなく話せる友人でもあるので、自然なコミュニケーションがとれて、演奏にも気心知れた気配がにじむのが Trio Rizzle の魅力だと思います。ずっと一緒にやってきてトリオを組むのも自然に思えたり、ランチタイムのベートーヴェンにはじまり、第1回は王道の大曲、2回目はフランスものや知る人ぞ知る秘曲、前回はロシアの名手・グリンゴルツさんと共演もさせていただいて、Rizzle の活動は、毎回冒険に出かけるようで本当に楽しいです。



Fumika Mohri

毛利：弦楽三重奏は、それぞれの楽器の独立性を大事にしながら全体を調和させていく難しさがありますが、だからこそ、みんなが日ごろ、ソロや室内楽などいろいろな活動していることがいい形で表れてくるのだと思います。作品の数は少ないかも知れませんが、魅力的な曲、やりたいものはいろいろあって、信頼するふたりとどこまで歩んで行けるか、この先もとても楽しみです。

― 弦楽四重奏や、同じトリオでもピアノ・トリオとはどう違いますか？

毛利：ピアノ・トリオは、ソリスト3人が集まってその場限りで演奏する機会も多いですが、弦楽三重奏はより緻密さが求められる点で弦楽四重奏に近い気がします。一方で、カルテットより個々の独立性が高く、内声がヴァイオラー人という難しさもあり、それが魅力とも言えますね。**笹沼**：ピアノ・トリオは、作曲家によって比重の違いはあれど、どうしたって柱はピアノです。和声とベース（土台）をピアノがなくてイニシアチブを取る。弦楽四重奏の場合は、その役割を低弦が担います。その点、弦楽三重奏はカメレオンというか、ヴァイオリンがずっとベースを握っているかと思えば、ヴァイオリンが低い音に降りてくることもあり、逆にチェロが高い音を担当することもある。それぞれの楽器がカバーする音域が広い。土台部分をかわるがわる担っていくのが、難しさであり魅力にも感じます。ピアノ・トリオや弦楽四重奏とは、その土台づくりの部分が大きく違うと思う。

田原：ピアノが入るとピアノの音程になってしまうけれど、弦楽器だけで音程をつくっていく難しさが面白さでもありますね。それを3人だけでやるのが、大変だけどやりがいです。

― 前回は、グリンゴルツとの共演で弦楽四重奏も聴かせていただきました。

毛利：グリンゴルツさんはすごく音の集中力のある音楽家で、音楽のイメージもはっきりお持ちで、なにせ求心力が凄かった。3人ともグッと引き寄せられました。

― 笹沼さんは音楽的影響だけでなく、譜面台をお揃いにされましたね（笑）。

笹沼：ミュートもです。借りてました（笑）。毛利さん、田原さんは面識があったけど、僕は初めましてで謎めいた印象から入りました。最近の“屈しやすい”演奏と違って、お客さまに耳を傾けさせる力のある、本物の音楽家ですよ。 Trio Rizzle としての音ができきた絶好のタイミングで共演させていただき、自分のなかに新しい引き出しがたくさんできました。彼と過ごしたのはリハと本番のわずかな日でしたが、いまでも一緒に演奏したときの感覚を鮮烈に覚えています。

田原：ヴェルビエや武生の音楽祭で彼の演奏を聴いて、以前から、なんて音楽がある人なんだろうと思っていました。一緒に弾くと、最初の呼吸で音を出した瞬間に、その曲の本質が理屈を超えて伝わってくるんです。音楽家ってこういう人

のことを言うんだな、と感じ入りました。本当にいい刺激になりました。

― 今度の公演ではゴルトベルクに挑戦されます。Rizzle バージョンは、どんな感じになりそうですか？

毛利：実は、3人でこれまでに2度、シトコヴェツキ編を弾いています（*）。そのときは演奏譜しか見なかったのですが、3月へ向けて9月にリハーサルしたとき、初めてピアノ譜と照らし合わせてみたら意外な発見が多くあり、シトコヴェツキはやはり凄いなと感じるところがあれば、なんでこういうパート分けをしたんだろう、どうしてここの音は省いたのかな、という疑問も出てきました。ヴァイオリンが完全に休みのパリエーションでは、チェロが相当ハイポジションまでいかなきゃいけなくて、大変そうにしか聴こえない。そこはヴァイオリンのほうが音楽的に美しいだろうとそれを試したり、ピアノ譜を見ながら変えたり直したりしていました。

田原：無理のあるパートを無理のない楽器にチェンジしてみたので、シトコヴェツキ編が一生弾けなくなるかも…と時々ありますが（笑）、聴いているかたが“弾きづらそう”“難しそう”“大変そう”と感じないようにやってみたいと思っています。

笹沼：Rizzle のオリジナルバージョンをつくるのが目的ではなくて、オリジナル譜が体に入った状態で演奏したいと思ったんです。シトコヴェツキ自身、そういう状態から意識というか、想像力を膨らませて編曲していますし、それを Rizzle としてどう咀嚼してどう表現に結びつけていくかは、これから本格的に試行錯誤します。最終的には、自分たちの響きを見つけ、それを説得力ある弦楽三重奏のかたちにし込みたい。そういう試みにしたいと思っています。

― シェーンベルクとの組み合わせとてもいいですね。

笹沼：シェーンベルクは、ゴルトベルクとの対比が意味あるものとして届くように弾きたいと思っています。五臓六腑に染みわたるじゃないけど、それがわかるように。



Ayako Tahara

― Trio Rizzle、意気盛んです。

田原：今後は、レパートリーを増やしたり、Rizzle の名前を知ってもらう意味で、新曲の委嘱もできたらいいと思います。

笹沼：僕らが核となるような室内楽の編成もやってみたいですね。常設の弦楽三重奏とピアニストがピアノ・カルテットをやったらどういう響きがするんだろう。委嘱するなら、複数の作曲家に小品を書いてもらって、ひとつの組曲に仕上がるようなもののがいいかな。

毛利：私は、グリンゴルツさんとの共演にとっても刺激を受けたので、巨匠というより、例えばひと回り上くらいの、自分たちに年齢が近くて引き出しを豊富にもっているアーティストと、また一緒にできたらと思います。現代作品にもチャレンジしたいですし、あとは純粋にベートーヴェンの Op.3 がまだなので、それを。

― 先も見据えつつ、年末のリハーサルでお会いしましょう。

（2024年11月／取材・文：トッパンホール）

* 2021年1月23日@汐留ホール／2023年12月21日@山口クリエイティブ・スペース赤れんが

Trio Rizzle Vol.4

2025年3月10日（月）19:00

毛利文香（ヴァイオリン）／田原綾子（ヴァイオリン）／笹沼 樹（チェロ）

シェーンベルク：弦楽三重奏曲 Op.45

J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲 BWV988

（D.シトコヴェツキ編 弦楽三重奏版に基づく Trio Rizzle バージョン）

5,000円／U-25 2,500円 全席指定

特別協賛：株式会社 竹中工務店

日時		公 演
1／20	(月) 19:00	トッパンホール ニューイヤーコンサート 2025 ピーター・ウィスペルウエイ (チェロ) 山根一仁、毛利文香 (ヴァイオリン)／湯本亜美 (ヴィオラ)／北村幹幹 (ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
	(月) 19:00	Trio Rizzle Vol.4 毛利文香 (ヴァイオリン)／田原綾子 (ヴィオラ)／笹沼 樹 (チェロ) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
3／26	(水) 19:00	エベヌ弦楽四重奏団 特別協賛：株式会社 安藤・間
	(木) 19:00	ベルチャ・クアルテット 特別協賛：東急建設株式会社
4／3	(金) 19:00	ベルチャ・クアルテット×エベヌ弦楽四重奏団 特別協賛：鹿島建設株式会社
	(木) 19:00	フライブルク・バロック・オーケストラ with クリスティアン・ベザイデンホウト (フォルテピアノ)
5／26	(土) 18:00	
	(月) 19:00	トーマス・ヘル(ピアノ) プロジェクト 2025 I リゲティ&バルトーク 山根一仁 (ヴァイオリン)／谷口知聡 (ピアノ)／竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン (パーカッション) 特別協賛：株式会社 竹中工務店

※開場は開演の30分前となります。 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2024年12月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION



第16回 TOPPANチャリティーコンサート

アーティストの熟演と多くのお客さまに支えられ16回目を迎える、TOPPANチャリティーコンサート。今回は注目の二人の俊英による瑞々しいデュオをお贈りします。

東亮汰は、いまや多くのステージで引っ張りだこのヴァイオリニスト。第88回日本音楽コンクールの覇者でもあり、2024年に開催されたヨハネス・ブラームス国際コンクール第2位入賞で話題となりました。数多くのオーケストラや奏者たちとの共演を重ねる一方、NHK Eテレのアニメ「青のオーケストラ」主人公の演奏も担当、CDデビューも果たす等、その目覚ましい活躍は多岐にわたります。確かな技術と豊かな表現力に加え、共演者や聴衆に愛されるその人柄、そしてあくなき探求心が、彼の音楽家としての世界をますます充実したものにしています。

第76回ジュネーヴ国際音楽コンクール第3位入賞など数々のコンクールで高い評価を受けている五十嵐薫子は、そのテクニックと華麗で明るい音楽が大きな魅力のひとつであると同時に、じっくりと作品に向き合う真摯な姿が印象的なピアニスト。室内楽では共演者との対話を楽しみながら音楽をつくり上げ、大胆さと繊細さをあわせもつその演奏は多くの聴衆の心をつかんで離さない、稀有な魅力にあふれています。

様々な作品・奏者との出会いを通じて得難い経験を重ねている東と五十嵐は、これまでも共演の機会があり、その相性は抜群。慣れ親しんだトッパンホールの舞台上で、彼らの若く柔軟な感性が作品に新たな光を照射してくれるに違いありません。どうぞお聴き逃しなく！

東 亮汰 (ヴァイオリン) & 五十嵐薫子 (ピアノ)
2025年1月31日(金) 19:00

モーツァルト：ヴァイオリンと管弦楽のためのロンド ハ長調 K373
クライスラー：ブニャーニの様式による前奏曲とアレグロ
R.シュトラウス：ヴァイオリン・ソナタ 変ホ長調 Op.18
リスト：ため息 《3つの演奏会用練習曲》より 第3番 変ニ長調
リスト：ラ・カンパネラ
《バガニーニによる超絶技巧練習曲集》より 第3番 嬰ト短調
ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 Op.78 《雨の歌》
全席指定：5,000円 ※印刷博物館入場可（当日のみ）
主催：TOPPANホールディングス株式会社
寄附先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

チケットのお申し込み・お問い合わせ：トッパンホールチケットセンター

TOPPAN
CHARITY
CONCERT



本公演の収益は、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) に寄附され、カンボジア女性の識字学習支援事業「SMILE ASIA プロジェクト」の推進に役立てられています。

多彩なオーボエの名技を堪能



瑞々しく勢いある感性をご紹介している〈ランチタイムコンサート〉。2月は、久々に管楽器にスポットを当てます。現在、読響首席を務めるオーボエの荒木奏美は、芸大在学中に東響の首席に抜擢、「オーボエの神様」とも称されるハインツ・ホリガーに認められ、オーボエ・トリオのメンバーとしてツアーに参加したほか、モーリス・ブルグ、ハンスイェルク・シェレンベルガーら巨匠とも共演を重ねている若き実力者です。今回はシューマンの名曲《幻想小曲集》をオーボエ・ダモーレで、ヴァルナー、カリヴォダをオーボエで演奏、持ち味の深みと奥行きあるサウンドを存分に楽しめるプログラムをお届けします。共演には、2024年11月に〈ランチタイム〉で渾身のメトネルを披露したばかりの秋元孝介が再登場、荒木の真剣勝負を支えます。どうぞご期待ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.132〉
荒木奏美 (オーボエ、オーボエ・ダモーレ)
心をさまよう

2025年2月13日(木) 12:15

秋元孝介 (ピアノ)
シューマン：幻想小曲集 Op.73
レオポルド・ヴァルナー：3つのロマンティックな小品
カリヴォダ：サロンのための小品 Op.228

入場無料 (要予約／お一人様2席まで)

受付期間：2024/12/23 (月)～2025/1/24 (金)

お申し込み方法：ハガキ (抽選制・当選者のみ通知)
〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
トッパンホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.132」受付係
(住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

表紙：ベルチャ・クアルテット

過去2回の出演で、研ぎ澄まされた緻密なアンサンブルが満場の聴衆を唸らせたベルチャQ。2024年6月の公演より、音楽の喜びに満ちあふれている表情が印象的な1枚を。それからわずか1年足らず、3シーズン連続での登場となる3月は、世界のトップで肩を並べるエベヌ弦楽四重奏団との豪華競演企画(全3夜)。一夜たりとも聴き逃せない夢のひとつをお楽しみに。

キラリふじみ・コンサートシリーズ

ニューイヤーコンサート 2025 魅惑の旋律、芸術家の壮大なロマン…



埼玉県富士見市にあるキラリ☆ふじみの主催公演の企画を請け負って13年目になる。毎年1回だけのクラシック公演ながら(或いは、だからこそというべきか)、お客さまの集中度がとて高く、近年はまるでトッパンホールで公演を行っているかのようなライブの醍醐味も感じられるようになった。晴れた日には水が張られた中庭の景色がすばらしく、それだけでも訪れた人の心を癒してくれる。また、ステージから見ると馬蹄形を想起させる客席がアーティストの心を躍らせ、コンサートへの意欲を高めるという。レコーディングにしばしば使われていることでも有名だ。トッパンホールクラブ会員のお顔も見かけるので、訪れてくださった方は予想以上に多いのではないだろうか。本当にありがとうございます。

さて、そのキラリ☆ふじみで行う今回のニューイヤーコンサートは、ロシアを代表する作曲家、プロコフィエフとラフマニノフのソナタに、チャイコフスキーのピアノ三重奏曲《偉大な芸術家の思い出》。新年早々から気宇壮大な音楽がたっぷりとホールに響く。演奏するのは、トッパンでもキラリでもお馴染み、私が絶大な信頼を置く笹沼樹 (チェロ) と周防亮介 (ヴァイオリン) に、今

トッパンホール企画協力公演

回のプログラムを睨んで出演を依頼した五十嵐薫子 (ピアノ) が相みえる。ラフマニノフのチェロ・ソナタは、彼のピアノ曲以外での最高傑作。プロコフィエフも原曲はフルートとピアノのためのソナタだが、初演を聴いたオISTRAフの助言を得たヴァイオリン版は原曲以上に魅惑的で、プロコフィエフの持ち味が凝縮した作品となっている。《偉大な芸術家の思い出》は、彼の交響曲をも思わせる壮大な大作で、有名な変ロ短調のピアノ協奏曲同様にピアニストにとっては覚悟のいる作品。キラリ初登場となる五十嵐が同世代の弦の名手たちとどんな演奏を繰り広げるか。ピアニストにはソロの力量とアンサンブルの能力がひととき問われる曲だけに注目だ。

2025年12月からホール改修のため休館になるそうで、コンサートもしばらくお休み。ぜひこの機会に足を運んで、キラリ☆ふじみでのニューイヤーコンサートを体感していただけたらと願っている。

(西巻正史／プログラミング・ディレクター)

2025年1月19日(日) 15:00

周防亮介 (ヴァイオリン)／笹沼 樹 (チェロ)／五十嵐薫子 (ピアノ)
プロコフィエフ：ヴァイオリン・ソナタ第2番 ニ長調 Op.94bis
ラフマニノフ：チェロ・ソナタ ト短調 Op.19
チャイコフスキー：ピアノ三重奏曲 イ短調 Op.50
《偉大な芸術家の思い出》

全席指定：4,000円／U-25 3,200円／高校生以下1,000円

主催：公益財団法人キラリ財団
会場：富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ(東武東上線 鶴瀬駅)

お問い合わせ・ご予約：キラリ☆ふじみ 049-268-7788

編集後記

今号は弦楽四重奏のトップランナー、ベルチャ・クアルテットとエベヌ弦楽四重奏団を大特集！現在、両クアルテットは世界各国で八重奏のツアーを展開中。地球を駆け巡っている彼らに、3月の日本ツアーに寄せて、ベルチャQにはメールで、エベヌQには岡本侑也

さんにリモートでインタビューしました。ともに紙面に載せきれないほど、たくさんさんのエピソードをお話しくださいました。こぼれてしまったエピソードは、本番に向けてWEBサイトで順次公開していきますので、公演とあわせて、ぜひ楽しみにお待ちください。(雪)